

読解テキストの書き換え

学習者が読みやすいグレーディッド・リーダー作成を目指して

サンドーム田畑光恵

ビクトリア大学 ニュージーランド、ウエリントン

mitsue.sandom@vuw.ac.nz



サンドーム田畑光恵 (2012) 読解テキストの書き換え学習者が読みやすいグレーディッド・リーダー作成を目指して . Extensive Reading World Congress Proceedings, 1, 182-184

Sandom-Tabata, M., (2012). Dokkai tekisuto no kakikae: Gakushusha ga yomiyasui gurededo rida sakusei wo mezashite [Rewriting comprehension tests: Towards creating easy-to-read Japanese graded readers]. *Extensive Reading World Congress Proceedings, 1, 182-184*

第二言語としての英語教育の読解研究では、Authenticity Debate (日本語での仮称を「真正論争」とする) が長年にわたって論じられている。「真正論争」とは、オリジナルのテキストを唯一の「真正な」テキストとみなし、そのみを学習者に与えるべきか (Honeyfield, 1977 など) あるいは、書き換えられたテキストの有効性も認め、読解学習の中で積極的に活用していくべきか (Bamford, 1984 など) を論じるものである。英語教育では盛んになされている「真正論争」であるが、学問的に黎明期にある第二言語としての日本語教育の分野では、この論争が十分にはなされていない。しかし、書き換え文の有効性を認めるかどうかは、多読を推進するか、精読に重きを置くかなどの読解指導そのものにも関わってくる問題であり、十分な議論と実証的研究が必至であろう。本研究では、16名の日本語の中級学習者がオリジナルのテキスト、そして4種類の異なる書き換えテキストを読み、母語による自由再生プロトコルを行った。一般化推定方程式 (Generalized estimating equation) による分析の結果、被験者の読解 (テキスト内容の理解度) は、書き換えテキストで有意に高いことがわかった。また、自由再生プロトコルの質的分析の結果、被験者は書き換えテキストでは、内容をよく理解し楽しんでいるが、オリジナルのテキストでは、多くの未知語などが起因し、読解へのモチベーションが損なわれ、テキストの内容を楽しめていないことがわかった。

実験および分析方法

課題

日本語学習者がオリジナルテキストと書き換えテキストを読んだ場合について、以下の2点を明らかにする。

1. のテキストを読んだ場合読解 (テキストの内容理解) が最も高いか。
2. テキストの種類によって、情意面での変化は見られるか。

被験者

11名の英語母語日本語学習者と5名の中国語母語日本語学習者が本研究に参加した。全員がニュージーランドの大学生で、被験者のレベルは、中級から、上級と広範囲にわたる。

実験方法

1. 被験者は、学習履歴や日本語テキストのどの要素を難しいと感じるかなどについてのアンケートに回答し、日本語のレベルチェックテストを受けた。
2. 被験者は一人ずつ、自由再生法による読解タスクを行った。まずテキストを読み、内容に関して覚えていることをすべて口頭で述べた。発話は録音された。使用言語は、英語とした。5名の中国語母語話者がいたが、いずれの英語力も自由再生を行うに十分であったためである。次に、読解判定テストを受けた。このテストの設問は、

短文での解答を要求するものである。最後に、いずれの被験者もインタビューを受け、読んだテキストすべてについての感想などを述べた。

使用テキスト

使用されたテキストは、5つの異なる話題のオリジナルテキストと、それを4種類の方法で書き換えたテキストである。合計25のテキストが使用された。

(5つの異なる話題)

- A. 良きライバル
- B. 被爆者
- C. アドバイスをください
- D. ミニスカート
- E. 旅行者

(テキストの書き換えから見た5つのタイプ-扱われた低頻出語は同じものである)

1. オリジナルテキスト (Unmodified Text) - 書き換えなし、本文のまま。
2. 簡略化テキスト (Simplified Text) - 低頻出語を高頻出語で置き換え、複文で理解が難しい文章は、不自然にならない範囲で複数の短文に分割されている。
3. 詳述化テキスト (Elaborated Text) - わかりにくい文化背景や語が詳述されている。また、低頻出語は高頻出語に置き換える代わりに、その語の後に説明を入れていく。その際、「つまり」などの語が使用されることも

多い。

4. 語義リスト付きテキスト (Text with a marginal glossary) — 本文の右側に小さなサイズの文字で低頻出語の語義を日本語で入れた。

5. コンピュータ・ポップアップテキスト (Text on a computer screen with pop-ups) — コンピュータ上で読むPDFのテキストで、低頻出語の上にポップアップが付いており、カーソルをあてると語義がでてくる。

実験手順

各被験者が、5つの異なる話題についての異なる書き換えテキストを読み、自由再生を行い、読解判定テストを受けた。従って、各被験者が同じ手順を5回繰り返したことになる。手順としては、ラテン方格法 (Latin Square Design) が用いられ、与えられるテキストの順番は、相殺された。

終了後インタビュー

すべての手順が終わった後、実験者によってインタビューが行われ、録音された。

分析方法と結果—読解の変化

被験者の自由再生プロトコル (free recall protocol) を、アイデア・ユニット (Carrell, 1984) に分け、テキストの全アイデア・ユニットの何%が再生できたかを見た。そして、書き換えの種類、テキストのトピック、母語、日本語能力、更に読後に5段階評価で答えてもらった、「理解度自己診断レベル、面白さレベル、内容への新密度レベル」の3要素、これらすべてを変数とし、一般化推定方程式により分析した。その結果、被験者の読解は、テキストの書き換えの種類、トピック、母語、日本語能力により有意な差がでることがわかった。具体的には、オリジナルテキストでは、すべての書き換えテキストに対して、読解が有意に低かった。また、書き換えテキストの中では、簡略化テキストが詳述化テキスト以外のすべてのテキストに対して有意に高い読解を示した。詳述化テキストに対しての読解の差も、有意傾向を見せた。読解の高かった順に示すと、簡略化テキスト > 詳述化テキスト > コンピュータ・ポップアップテキスト > 語義リスト付きテキスト > オリジナルテキストである。

読解判定テストの結果も同様に分析され、類似の結果が得られた。但し、母語による読解の差は有意ではなかった。これは、サンプル集団が小さいことに起因していると思われる。なお、「理解度自己診断レベル、面白さレベル、内容への新密度レベル」に関しては、テキストの書き換えとの興味深い関連が見られた。例えば、被験者は、簡略化テキストを読んだ場合、自己理解を高いと診断し、内容の面白さも高く評価し、内容についても自分がより精通していると思う傾向があることがわかった。

読解には、未知語の割合が大きく影響することが実

証データで示されている。たとえば、Hu & Nation (2000) などは、学習者が一人で楽しんで読むためには、テキスト中の98%以上の語彙が既知語でなければならないと報告している。本研究では、事前の語彙テストが可能ではなかったため、読解タスクの後に、書き換えの対象となった語彙 (平均で語彙全体の11%) を知っていたかどうかの確認を行った所、被験者は平均で書き換え対象語の49.9%を未知語と確認した。即ち、本研究の被験者たちは、使用されたオリジナルテキストの語彙の98%以上を既知語として習得していなかったということになり、書き換えテキストで与えられた語義の助けが読解を大いに高めたものと考えられる。

結果—情意面での変化

自由再生プロトコルの質的分析並びに終了後インタビューから、書き換えテキストが情意面で被験者の読解に対するモチベーションを高め、内容を楽しむ事を促進したことがわかった。まず、被験者がオリジナルテキストを読んだ後の再生プロトコルには、未知語が多すぎて、早々に理解することを断念してしまったことを弁解するような内容のメタ発話が多かった。例えば、ある被験者は「たくさんの漢字! (溜息と笑い)... 本当に全然わかりませんでした」と述べている。一方で、簡略化テキストでは、レベルの低い生徒でも、内容に没頭し、話の展開を満喫していることを表すメタ発話が得られた。

次に終了後インタビューからは、被験者の半数以上が簡略化テキストを他のテキストより好むということがわかった。その理由には、単語や漢字がよくわかるという事に並んで、文章が短くてよみやすい、という意見も多かった。また、事前の学習履歴アンケートと終了後インタビューで、「日本語での読解を第一言語の読書と同様に楽しみたい」と示唆した被験者の場合、簡略化テキストや詳述化テキストのように文の中で何らかのテクニックがほどこされているテキストの方を他の2つの書き換えテキスト (つまり文の外に語義リストやポップ・アップがあるテキスト) よりも好むことがわかった。その理由としては、「文の中に書き換えが自然に組み込まれていると、読みの流れが妨げられない」というものであった。反対に、同じく事前の学習履歴アンケート並びに終了後インタビューで、「第二言語での読解を知識や新しい言語要素を獲得するための作業と見ている」と示唆した被験者の場合は、文と読解を助けるであろうテクニックの部分が別になっている書き換えテキストを好む傾向が見られた。その理由の一つとして、ある被験者はポップ・アップを賞賛して、「ポップ・アップの場合、単語の意味を思い出そう、推測しようという操作を自分で決定できる。文章の中にそれが組み込まれている詳述化のテキストなどは、否応なしに単語の意味を見なければならぬし、わかりにくい」と語っていた。

なお、紙で読むのとコンピュータ上で読むのと、いずれを好むかについて聞いたところ、大多数が「紙で読む方法」を選んだ。ただ、多くの被験者が、「コンピュータで読む」のは、勉強には便利だ」という評価を与えていた。本研究では、読みにかかった時間を記録したが、Miller と Kintsch(1980)に従い、一つのアイデア・ユニット再生にかかった時間を割り出したところ、コンピュータのポップ・アップテキストは、被験者がとても難しいと感じたオリジナルテキストと同程度に効率が悪かった。今後、コンピュータ上の読解の効率を更に探求する必要があるだろう。

まとめ

以上、実験的に短いオンラインのオリジナルテキストとそれを4種類の方法で書き換えたテキストを使い、中級レベルの日本語学習者の読解と学習者がどのようなタイプのテキストを好むかを見た。被験者の読解は簡略化テキストで優位に向上し、簡略化テキストはほぼ全員の生徒から最も好まれた。一方で、難しいと見なされたオリジナルテキストを最も好んだ被験者はいなかった。これらをまとめると、第二言語としての日本語を楽しんで読むにはどのようなテキスト、そして媒体が適しているかを考えると、紙のテキスト(本)を用い、語義のリストなどを付けるのではなく、文章中に自然に組み込まれた書き換え、しかも文章の長さを短くするように努めた簡略化(Simplification)という方法が、初級や中級前半の日本語学習者には最も好まれるのではないかということが言えるであろう。

参考文献

- Bamford, J. (1984). Extensive Reading by means of graded readers. *Reading in a Foreign Language*, 2(2), 218-60.
- Carrell, P. L. (1984). The effects of rhetorical organization on ESL Readers. *TESOL Quarterly*, 18(3), 441-69.
- Honeyfield, J. (1977). Simplification. *TESOL Quarterly*, 11(4), 431-40.
- Hu, M., & Nation, I. S. P. (2000). Unknown vocabulary density and reading comprehension. *Reading in a Foreign Language*, 13(1), 403-30.
- Miller, J. R., & Kintsch, W. (1980). Readability and recall of short prose passages: A theoretical analysis. *Journal of Experimental Psychology: Human Learning and Memory*, 6(4), 335-54.